

人間はどこまで動物か①

人間は生後一歳になって、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に、やっとたどりつく。そうだとすると、この人間がほかのほんとうの哺乳類なみに発達するには、われわれ人間の妊娠期間が現在よりもおよそ一カ年のばされて、約二十一ヵ月になるはずだろう。

——— アドルフ・ポルトマン
『人間はどこまで動物か』

人との出会いと同じように、本との出会いは不思議なものだ。

中学生の頃、毎日通っていた書店にノーベル賞の受賞者としても知られる、コンラート・ローレンツの『ソロモンの指環—動物行動学入門』という本があった。かつてシートン動物記とファーブル昆虫記が大好きだった私は、いつもこの難しそうな本の背表紙を見るたびに手に取りたい衝動にかられるのだけれど、やっぱり手を出せない。この本を翻訳した日高敏隆という人も、なんだか面白そうな本を書いている。

気になりながらも年月が過ぎ去り、あるときその近くにあった別の本を手にとった。タイトルは、『人間はどこまで動物か』。著者はスイスのバーゼル大学教授であり、動物学や生物学の権威であった、アドルフ・ポルトマンである。

出版形態は新書なので、もちろん初学者にも分かりやすく書いてある。しかし、内容は決して中学生が興味を持つようなものではなかった。でも、なぜか気になって、埃をかぶっている古びた新書を購入し、夢中になって読んだのを覚えている。それから、この本はいつも私の書棚の片隅にあり、これまでに何回も読み返した。アメリカへ留学していた時期も、たしか書棚のどこかに置かれていたはずだ。

こんな本に熱中したのなら、理系に進んでも良かったはずだが、不思議と動物学や生物学に興味を持つことはなかった。エラノス会議の主要人物の一人であった、ポルトマンの文章には、科学者らしくない哲学的・文学的な表現が少なくない。生物学の調査結果や統計資料の分析ではなく、「人間とは何か」とか、「文化とは何か」といったテーマに関するポルトマンの思索の方に、むしろ興味を持ったのだと思う。だから、大学に赴任して「人間論」という科目を担当することになったとき、最初に手に取ったのもこの本であった。

*

本書でポルトマンが提唱した、最も有名なテーゼの一つは「生理的早産」という概念である。

まず、ポルトマンは生まれだての動物の状態にもとづいて、極めて広い比較の見地から動物を「巣に坐っているもの(就巢性)」と「巣立つもの(離巢性)」に分類する。でも、ポルトマンはもともと鳥類の形態学や発達史を専門とし、さらに広い生物学の研究を進めた人である。だからこの分類も、本来は鳥類の生態研究に使われた概念であって、そのまま読み進めると頭が混乱することになる。多くの哺乳類が「巣立つもの(離巢性)」

として、分類されているからだ。

簡単に言ってしまうと、生まれてすぐに目を開いて起き上がり、走り回ることのできる仔馬などが「離巢性」を持つ動物であり、これに反して多くの鳥類のように、長い間巣にとどまって自ら食することもできない動物が「就巢性」を持つ動物なのである。哺乳類や鳥類といった分類とは、カテゴリーの基準が異なることに注意しなくてはならない。

だから、大学生になってドイツ語を学び始めたとき、この翻訳は不適切なのではないかと考えて、すぐに独和辞書を使って原語の意味を確認した。もとの言葉の意味からすれば、「巣に留まっているもの」と「すぐに巣を離れるもの」といった訳語の方が、本来の意味に近いのではなかろうか。

*

閑話休題。

離巢性の動物は、進化のうえでかなり特殊化した身体の構造をもち、脳が発達し、長い妊娠期間を経て少数のこどもを産む。ちょうど、この本を購入した中学生の頃に「オルカ」というタイトルの映画があった。たぶん、その映画のなかでシャチの出産シーンを見たのだろう。海のなかで生まれたシャチは、すぐに親と同じように泳ぎだす。親と同じように行動できなくては、シャチは生きていくことはできない。生まれて間もない競走馬は、ほどなく立ちあがって軽やかなステップを踏むものだ。

霊長類は、基本的に「巣立つもの(離巢性)」なので、本来は誕生の時からよく発達した感覚器官と開いた眼を持ち、生後間もなく親と同じような行動を取ることができるはずである。しかし、人間の新生児はなぜか極めて未発達な状態で生まれてくる。生まれだての人間の赤ちゃんは、ほとんど自分では何もできない。ポルトマンの表現を引用してみよう。

霊長類(人類と猿類)は「巣に坐っているもの」(就巢性)の誕生時の状態に相当する段階を母胎内で経過していく。したがってその誕生の瞬間に、その発達のはるかにすすんだ段階に到達していることになる…このようにながいが発達の段階を通りながら、人間の新生児は不思議にもおそろしく未成熟で能なしである。(39頁)

人間は、哺乳類の「巣立つもの」として生まれるはずの動物である。にもかかわらず、人間の新生児は、なぜ極めて未発達な状態で生まれてくるのか。その理由こそが「生理的早産」の仮説なのである。

[参考文献]

アドルフ・ポルトマン(高木正孝訳)『人間はどこまで動物か』岩波新書、1961年(第1刷)。